

フランス近代絵画とジャポニスム

ブリジストン美術館 土曜講座メモ

講師 高階 秀爾

2006年5月13日

文責 [美術散歩](#) 管理人 とら

1. **1867年のパリ万博**・・・1853年にペリーの来航があり、日本も鎖国の眠りから覚めたわけであるが、これは同時に産業革命を基盤とする交通輸送手段の発展の結果でもあった。パリ万博に先立つ1862年のロンドン万博にはウォールマット公使が持ち帰った日本の文物が出展されている。この時にフランスの詩人ゴーチェの娘 Judith Gautier が日本からきたものを見て感動し、その後日本美術のフランスへの紹介に尽力した。パリ万博の開かれた1867年は、徳川時代の最後の年で、徳川幕府が作った日本館のほか、佐賀鍋島藩と薩摩島津藩がそれぞれ別に出展していた。パリ万博の日本館の様子は当時のフランスの英字新聞に載せられた版画によって知ることができる。
2. **日本の大衆芸術の紹介**・・・はじめは日本の芝居や踊りが興味を惹いたようで、パリのオペラ座でも《夢》という日本を題材とした演劇が上演された。当時は着物・扇子・傘などが珍しがられた。蝶々夫人のお菊さんの画では目が釣りあがっているが、当時西欧人からみると日本人の目は釣りあがっていると理解されていたようである。1900年になってからであるが、川上音二郎劇団の貞奴の舞台が大評判になり、Kimono Sada Yacco という着物がパリで作成、販売された。
3. **工芸における日本の影響**・・・エミール・ガレのガラス器に鯉のデザインがみられるのは、Japon Artistique という雑誌に鯉の絵が載っているように、鯉が日本的なものにとらえられていたからである。また「日本では日常品に芸術品が用いられている」という事実も西欧人からみれば驚きであった。ガレはその他にバツタ、トンボ、草模様などの日本のモチーフを多用したガラス器や木工品を作り、ルネ・ラリックはトンボの有名なブローチ・髪飾り・櫛などを製作した。
4. **浮世絵の影響**・・・はじめは広重の草子ものの中に見られる魚の干物なども興味を引いたようである。事実、ロイヤル・コペンハーゲンの焼物にもこのようなデザインのものがある。ギュスターヴ・モローの水彩の中にも日本の絵草子の影響とおもわれるものがある。扇子や団扇などが大変興味を惹いたようで、モーリス・ドニ、ゴーギャン、マネなどの絵の中に静物として取り込まれている。陰影やグラデーションがなく、それ

でいてきっちりと対象をとらえるという浮世絵の影絵的性格、上から見た俯瞰的な構図、さらには縦長の作品などの日本の影響は、ボナールの画にはっきりと見てとれる。また北斎の富士三十六景のような連作は、モネがいろいろな連作を描いたことと関係がある。事実、モネが過ごしたジベルニーには多数の浮世絵が残っている。セザンヌがセント・ピクトワール山をくりかえし描いたことも北斎などの影響であろう。北斎の「波」は特に有名で、ドビッシーの交響詩《海》の楽譜の表紙となっているほどである。また《エッフェル塔三十六景》を描いた画家アンリ・リヴィエールは、自分の印鑑を画に押しつけてほどのいれこみようであった。

5. **画と文字の統合**・・・ルネ・マグリットの《これはパイプではない》という画がある。これは「このパイプは画だから、これからタバコはすえない」というマグリット特有のユーモアであるが、CET N'EST PAS UNE PIPE という文字板はパイプの画の下に貼りつけられた形で描かれている。西洋絵画ではルネッサンス以降、画と文字が混ざり合うことはなかった。中世の写本ですら絵と文字は別々なものとして作品を構成していた。ロセッティやミレイのようなラファエル前派の画家はテニソンの詩集《シャーロック》に挿絵を描いているが、それでも画と詩が上下に分かれた配置となっている。ウリアム・モリスは字と画を一体化しようと出版社に働きかけたが、できあがったものはやはり別々なものであった。日本では先ごろの琳派展に出ていた本阿弥光悦筆・俵屋宗達下絵の《鶴下絵三十六歌仙和歌巻》のように絵と字の統合が完成している。字の大きさ、配置などが「散らし書き」になっているのである。これは日本では絵と書のいずれにも筆を使うということと関係がある。これを模倣した日本の和歌の翻訳集《蜻蛉集》が、1884年パリで刊行された。西園寺公望がまず翻訳し、前述の Judith Gautier がこれを直し、山本芳翠が画を描いたもので、字の大小といい、配置といい、みごとな散らし書きとなっている。この本は当時評判となっただけでなく、ギュスターヴ・モローも購入したとのことである。マラルメは、《Le Hasard》において活字による散らし書きを試みているが、これはヨーロッパでは前衛であった。アポリネールは、《Il Pleut》において活字による絵文字作成に挑戦している。でき上がった冠、ハート、雨などは結構上手いが、活字による雨の線などはやはりギクシャクしている。

6. **絵画におけるジャポニスム**・・・1) **ホイッスラー**：日本の衣裳・屏風・団扇など浮世絵からの転用を行った画がある。2) **マネ**：《ゾラの肖像》では花鳥画の金屏風や浮世絵が描かれており、《モリゾの肖像》では彼女の肖像の上に3枚続きの海女の浮世絵らしき絵がかかっている。《笛を吹く少年》の表現は日本的であり、鳥居清永に類似の構図の絵がある。《マラルメの肖像》には金屏風が描かれており、絵全体を塗りこめて、背景を閉ざしている。《ナナ》では背後に川と鶴が描かれ、紳士が半分で断ち切

られた浮世絵的な表現となっている。3) モネ：《ラ・ジャポネーズ》は第2回印象派展に出品された画であるが、打掛の背中や裾に模様があり、これを見せるためモデルのカミーユは無理な姿勢をとっている。手にした扇は三色なので、フランスの三色旗が残っているとのジョークがある。この画の団扇の中に《海老で鯛を釣る図》の一部が描きこまれているものがあるが、この全体図を写した皿が残っている。《ジベルニーの太鼓橋》は広重の《江戸百景 亀戸天神》と似ている。《睡蓮》では、空を直接描かず、水に映ったところだけを描いていることや、ヴァリエーションの連作を作っていることは日本絵画との関連があるといえる。モネは「自分の画は、『陰によって実在を示し、部分によって全体を見せる』という古い日本の絵からきている」と述べている。4) ローテック：鳥獣戯画や白隠の絵にみられる太い線、細い線を使った線描はきわめて日本的なものであるが、《アヴリルのポスター》では太さを違えた線を使い、さらに歌姫を斜め上から見た構図とし、書き文字を入れ、《ブリュアル》ではモデルに日本的な服装を着せ、さらにハンコのような署名を描きこむなど日本の影響が強かった。5) ドガ：広重の《仲見世》では、門や建物の一部しか見せず全体が表現されているが、このような構図はドガの《競馬場》、《アブサン》、《バレーの踊り子》などに取り入れられており、《サーカスの曲芸師》では逆に下から見上げる視線となっている。6) ヴァロトン：《子供が遊んでいる画》では上からの俯瞰法を使っている。7) ゴッホ：ゴッホは、1886年にパリに出てから、急に明るい画を描きだしたが、これには二つの理由がある。第1は印象派の画家の影響、第2は日本の浮世絵の影響である。浮世絵は安物しか持っていなかったようであるが、1987年の《タンギー爺さん》には、実在の浮世絵がいくつもとこまれている。溪泉栄泉の模写《花魁》では、人物を左右逆に描いている。これは美術雑誌で既に逆になっていたからである。豊国や広重の影響も大きい。特に広重の模写《花咲く梅の木》では、文字を書き加えていること、空を赤く描いていることが注目される。《種まく人》では太い切り株が途中で切れた構図となっており、《ムスメ》のスカートの模様がすべて前向きになっているのも日本的である。《耳きり後の自画像》では目は釣りあがっていないが、《ゴーギャンに贈った自画像》では目が釣りあがっている。ゴッホは南フランスに来て、「日本にきた」といったそうである。8) ゴーギャン：《説教の幻影》では、ゴッホと同じく空が赤く描かれ、樹が斜めに切れており、取っ組み合うヤコブと天使は北斎漫画のデザインを借用しており、登場している牛は宗達の真似ではないかとの説もある。9) プラマンク：《ドランの肖像》は日本的である。10) マティス：ブリジストン美術館の《縞ジャケット》は平面的で、線描が多く、日本的である。このようにジャポニスムは20世紀にも残ったといえる。